地質ニュース590号，6頁，2003年10月
Chishitsu News no.590, p.6 , October, 2003

地質標本館と特別展
－富士山特別展の開催に寄せて－

青　木　正　博[1)]

地質標本館の大きなアンモナイト化石の前で，一人の少年が屈み込むようにしていました．背格好からすると小学校低学年でしょうか．そばに解説が置かれていますが，ほとんど目に入っていないようです．表から裏から，舐めるようにアンモナイトを眺め回し，手のひらで押してみたり撫でたりしていたかと思うと，ついには鼻を近づけてにおいを嗅ぎました．少年は，自分のもつ記憶と感覚を総動員して，未知の物体を理解しようとしているように見えました．

「人間は，能力をフル稼働させて認識能力を広げる過程に快感を覚える動物である」

私は少年のあまりに真剣な様子を見ながら，ある脳科学者の言葉を思い出していました．

“未知との遭遇”の予感を抱いて，また“事物を違った角度から眺められる”ことを期待して，人々は博物館を訪れるのでしょう．地質標本館も，来館者の年齢や予備知識に応じて，子供から専門家まで，それぞれに興奮を与え続けられる施設でありたいと思いました．

“未知との遭遇”がもたらす興奮と可能性を知り尽くした地質学者が，知恵を絞って作った博物館が地質標本館です．地質標本館には，館内のユニークな展示物に加えて，地質調査総合センターの擁する200名以上の研究者により支えられているという強みがあります．たとえば，館内の展示は，最新の研究成果にもとづいて随時チェックされ必要な改修が提案されますし，来館者の要望に応じて，第一線の研究者が展示説明に当たることも可能です．一方，研究ユニットから見た場合には，研究成果を一般社会に直接紹介できる場として地質標本館は高い利用価値を持っています．研究者集団と地質標本館のこのような連携関係は，成果普及と生涯教育に関する大きな可能性の源であり，同時に，地質標本館を世界的にもユニークな存在にしています．

幅広い来館者に対し，活きの良い情報を提供しようとするとき，床面積の不足が悩みとなります．この点については，期間を限った企画展示を随時組み合わせることで，質量ともに豊かな情報提供ができるよう工夫しています．中でも夏休みの時期に行う特別展には，多くの来館者が見込まれることから，特に力を注いでいます．夏の特別展のテーマとして，今年は富士山が選ばれました．

富士山はその美しい山容により古くから日本国民に愛されて来ました．約3年前，富士山直下を震源とする低周波地震が群発し，噴火に発展するのではないかと心配されました．同時に新たな観測と研究もスタートし，市民の関心も一気に高まりました．多くの市民が富士山に注目しているこの機会に，富士山の現状と予想される未来について，私たちの持つ知識と考えを分かりやすくご紹介するために，地球科学情報研究部門の火山研究者を中心とする実行チームが組織され，須藤　茂総括研究員のリーダーシップの下に，展示内容，体験イベント，おみやげ，パンフレット，ポスター，普及講演，関連機関への協力要請などについて検討が始まりました．厳しい時間的制約の中で，実に多くのアイデアが詳細に吟味され取捨選択されて，次々に内容の濃い展示物になってゆきました．特別展のキックオフとなった7月26日は，産総研一般公開日という事情もあり，1,900余名の見学者で館内が埋め尽くされました．その後2ヶ月にわたる特別展の開催期間中も，例年の同時期よりかなり多くの見学者を集めました．特別展で使用された大型展示ポスターはA4に縮小印刷され，冊子体として入館者を含めて広く配布され全国から好評を頂いておりますし，体験イベントを含む特別展の全容は地質ニュースの特集号2冊に盛り込まれ，さらに広い範囲の皆さんにお伝えできることとなりました．

市民にとって関心の深いテーマをとりあげ，第一線の研究者が最新の情報をわかりやすく提示し，多くの媒体を通して迅速にしかも広範囲に提供し得たという点において，富士山特別展は，今後の目標になる催しであったと思います．研究にも成果普及にも情熱を持った研究者集団の存在，画像処理やデザインに優れた能力を持つ支援スタッフの存在，地質調査総合センター独自の広報誌「地質ニュース」の存在など，地質調査総合センターと地質標本館の強みが存分に発揮された結果でもあります．来年以降の特別展においても，有利な要素が確実にかみ合うように工夫していきたいと思います．

1) 産総研 地質標本館

キーワード：地質標本館，富士山，特別展，成果普及